

防災教育を熱心に 伝え広める 犠牲者ゼロの防災を目指して

片田氏は、防災研究者としてさまざまな被災現場を見る中で、過去に4,000人もの命が奪われた明治三陸大津波の被災地である三陸沿岸部に着目。2003年、定期的に津波が来襲する三陸地方の住民の防災意識を調査すると、地震が起きて避難勧告が出されても住民は逃げようともしない状況であった。そのような防災意識の低さに危険を感じた片田氏は、「三陸沿岸全体となると範囲が広いが、二カ所でもしっか

3月11日、東日本大震災の大津波で多数の死者・行方不明者が出た岩手県釜石市にて、市内の小中学校全14校の児童・生徒約3,000人の避難率が100%に近かったことは「釜石の奇跡」と報道され、甚大な被害を及ぼした震災での数少ない明るい話題として取り上げられた。

このことは片田敏孝氏が、自然に向かい合う姿勢を根本から問い直す防災教育の必要性を強く感じ、粘り強く教育委員会、子どもや保護者、地域社会に対して防災教育を長年にわたり推進してきたことに起因する。



かた だ とし た か
片田 敏孝 Toshitaka Katada

群馬大学大学院 工学研究科 教授
Professor, Dr. Eng.
Graduate School of Engineering, Gunma University

岐阜県出身。専門は災害社会学。群馬大学広域首都圏防災研究センター長、群馬大学大学院工学研究科教授、東京大学大学院などの客員教授。内閣府中央防災会議「災害時の避難に関する専門調査会」委員、総務省消防庁「消防審議会」委員、気象庁「東北地方太平洋沖地震による災害を踏まえた津波警報改善に向けた勉強会」委員、文部科学省「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理に関する有識者会議」委員などを歴任。

推薦者 **高田 邦昭** 国立大学法人群馬大学 学長



子どもたちと通学路点検をする片田氏

りとした津波防災の雛形をつくり、それを沿岸各地に広げていこう」と考案。その意志に賛同した釜石市と共同で防災教育への取り組みを始めた。氏は防災意識を地域文化として根付かせるため、子どもを通じて保護者や地域を啓発。防災教育を受けた小中学生は、10年で成人となり20年経てば親となる。すると、「地域で防災教育の再生メカニズムができる」と考えた。そして、親子での避難所地図の作成や小中学校の合同津波避難訓練など実践を重ねた。

片田氏の防災教育の基本理念は「知識を与えるだけでなく、自然に対する畏敬の念を再認識させ、命を主体的に守る人本来の姿勢の回復を図り、地域連帯による被害軽減とそこにおける貢献意識の定着」である。それを子どもたちに理解させ、実行性のある行動に結び付けるため、①想定にとられるな、②その状況下において最善を尽くせ、③率先避難者たれ、という3つを「避難3原則」として徹底してきた。その結果、地震直後に児童・生徒たちは片田氏の防災教育を実践。あるものは小学生の手を引き、あるものは幼児が乗るベビーカーを押して走り、多くの命を救うこととなった。

現在、その成果は全国から注目され、氏は各地へ出向き、豊かな自然と暮らし続ける「犠牲者ゼロの防災」を目指した活動に尽力している。



子どもたちと避難所地図を作成する片田氏



東日本大震災直後の釜石で現地調査する片田氏